様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００３０６

研究課題名（和文）肥前・薩摩を中心とする近世九州歌壇の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research on the Kyushu poetry circles of the Edo period, with a focus on Hizen and Satsuma

研究代表者
日高　愛子（HIDAKA, AIKO）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授

研究者番号：２０７０６７４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世期における地方歌壇と堂上歌学との影響関係を解明するため、肥前・薩摩を中心に近世後期歌壇に関する資料の調査分析を行った。佐賀では近世後期に南里有隣を中心として私塾本教館の歌壇活動が見られることや、嘉永・安政年間に白石鍋島家が堂上風の歌壇を形成していたことを明らかにした。また、大隅地方の垂水歌壇では近世後期に飛鳥井家に師事し、堂上派の歌壇活動が活発化しており、その伝統が幕末まで続いていたことを明らかにした。さらに、近世後期肥後歌壇に、細川治年の末女就が関わっていたことや、細川家と有栖川宮家との文化的な関係について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、これまで具体的に検証されてこなかった地方の和歌資料を調査分析し、近世後期地方歌壇の活動実態を明らかにした。従来、近世後期以降の和歌は国学派や桂園派の系譜のなかで語られることが多く、堂上歌学はしだいに衰退したとされてきたが、地方歌壇に目を転じると、堂上歌学の影響を色濃く受けた堂上派地方歌壇とも称すべき歌壇活動が活発に見られる地域のあることが明らかになった。このことは、近世歌学の新たな側面に光を当てるだけでなく、幕末明治期の歌学を捉え直すうえでも重要な視点になると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we surveyed and analyzed waka poetry materials mainly from Hizen and Satsuma in order to elucidate the relationship of influence between local waka poetry circles and the waka poetry of court nobles in the Edo period. The results of the research revealed that in Saga, a private school called "Honkyokan" led by Nanri Yurin was active in the late Edo period, and that during the Kaei and Ansei periods, the Shiraishi Nabeshima family had formed a poetry circle influenced by the court nobles. It was also revealed that in the Tarumizu area of the Osumi region, the Asukai family provided waka guidance to the poets during the late Edo period, and that the tradition continued until the end of the Edo period, with the influence of the court nobles. The study also revealed the involvement of Hosokawa Naru, daughter of Hosokawa Harutoshi, in the Kumamoto poetry circles in the late Edo period, and the cultural exchange between the Hosokawa family and the Arisugawanomiya family.

研究分野：日本文学

キーワード：近世　歌壇

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中世より公家歌人たちは武家への詠作指導や歌学秘伝の相伝によって人脈形成をはかり、家業を維持してきた。近世になると大名家などと姻戚関係を築くことによって地方とのネットワークが保たれるが、近世後期以後は国学の台頭や桂園派の流行とともに堂上歌人の影響は衰え、地方歌壇との関係もしだいに薄れたとされる。しかしながら、堂上歌学は衰退したわけではなく、禁裏においてはむしろ伝統として重視され、幕末まで連綿と継承されてきた。近年、近世後期の堂上派にも目が向けられるようになってきたが、どのような地域で堂上歌学が受容され、新たな歌壇を形成していたか、具体的に検証した研究は少なく、課題も多く残されている。

そこで、近世後期以降に形成された地方歌壇の活動に着目し、堂上歌学が地方歌壇に与えた影響や、地方歌人と堂上との人的交流の実態と、地方歌壇から堂上歌壇への影響の有無について明らかにし、近世歌学の変遷について改めて考察することとした。近世の地方歌壇を支えた学芸と堂上歌壇との影響関係を明らかにすることは、幕末・明治期の歌学を捉え直すためにも重要な課題であると考えた。

２．研究の目的

近世期の九州歌壇の活動に着目し、地方歌人の活動を支えた中央や地域間における人的ネットワークと典籍の流通について明らかにする。その際、九州歌壇のなかでも、幕末・明治維新後にも活発な活動が見られる肥前・薩摩の歌壇を中心に取り上げ、大名をはじめとする歌壇の人物考証、和歌資料の具体的検証を通して、近世期の九州歌壇の和歌資料の蒐集状況や、ネットワークの形成、また人物間の具体的な交流活動について明らかにする。また、未発表・未整理の資料について精査し、学界へ新たな資料データを提供するとともに、和歌・歌人データベースを作成する。

３．研究の方法

⑴佐賀歌壇資料の調査分析

①『新拾葉集』の翻刻、出典解明と人物考証

佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『新拾葉集』を翻刻し、その出典と歌人について検証した。

②南里有隣を中心とする本教館和歌資料の調査分析

佐賀県立図書館所蔵の南里有隣を中心とする本教館和歌資料 3 点を調査、翻刻を作成し、歌人とその特徴について検証した。

・「万延元季詠草」（図 45-153）
・「本教館詠草一」（図 45-155）
・「本教館詠草二」（図 45-156））

③白石鍋島家和歌資料の調査分析

佐賀県立図書館鍋島文庫の近世後期和歌資料のうち、これまで殆ど取り上げられることのなかった以下の白石鍋島家の和歌資料に着目し、調査分析を行った。

[1]第 6 代当主鍋島直章（花殿）和歌資料
・「夏乃山苞」（鍋 080-2）
・「久世通理卿御加筆四季恋雑和歌」（鍋 082-64）
・「四季百首」（鍋 082-66）
・「白石社法楽和歌」（鍋 082-67）
・「宗匠家出題四季三十首」（鍋 082-70）
・「通題四季五十首和歌」（鍋 082-74）
・「六百番歌合百首和歌」（鍋 082-81）
・「詠草ひかへ」（鍋 082-8）
・「惣謌千三百三十八首」（鍋 082-9）

[2]第 7 代当主直暠夫人芳子和歌資料
・「和歌詠草」（鍋 082-10）
・「嘉永七年和歌詠草」（鍋 082-10）
・「安政二年和歌詠草」（鍋 082-13）
・「嘉永六年詠草」（鍋 082-14）
・「安政四年詠草」（鍋 082-14）
・「安政五年詠草」（鍋 082-14）
・「和歌」（鍋 082-82）

⑵薩摩・大隅地方の和歌資料の調査分析

①伊集院兼愷編『浪の藻屑』

伊集院兼愷編『浪の藻屑』（天保 6 年）について再調査を行い、記録類と照合し、成立過程と堂上歌人との関係について考察した。

②伊集院兼愷『すさび草』『すさび草後編』

伊集院兼愷の自撰歌集『すさび草』（天保 7 年）および『すさび草後編』（嘉永 2 年）を再調査し、飛鳥井雅光による和歌指導の実態とその影響について考察した。

③垂水手貫神社蔵奉納和歌

鹿児島県垂水市にある手貫神社（住吉神社）所蔵の新出の奉納和歌 28 点・謹書 1 通について、垂水市の方々と共同調査を実施し、内容を検証、翻刻した。

・伊集院兼愷「天保九年正月奉納十二首」
・川上親暁・伊地知季休・安山親直・谷山智昭・伊地知季融・前田清憲・伊集院兼愷「嘉永三年正月奉納百首」
・伊地知季融「嘉永六年正月奉納百五十首」
・関屋義武・増水氏泰・川上親暁・安山親俊・安山親直・伊地知季休・谷山智昭・藤原為治「嘉永七年正月四日当座和歌懐紙」
・伊地知季融「嘉永七年七月奉納名所百首」
・伊地知季融「安政二年六月奉納四字題百首」
・伊地知季融「安政二年七月奉納十題百首」
・前田清通「安政二年七月奉納十題百首」
・伊地知季融「安政三年五月奉納花月百首」
・伊地知季融「安政三年六月奉納五十首」
・伊地知季融「安政三年七月奉納三十首」
・伊地知季融「安政三年八月奉納百首」
・伊地知季融「安政三年九月奉納二十三首」
・梅本実広「慶応四年四月奉納十五首」
・和田助輔「慶応四年五月奉納十五首」
・安山親俊「慶応四年八月奉納百首」
・和田助輔・町田実維・梅本実広「慶応四年八月奉納百首」
・関屋義武「慶応四年八月奉納十五首」
・前田清通「慶応四年八月住吉五十首」
・前田清通「慶応四年八月八日奉納和歌謹書」
・梅本実恵「明治二年九月奉納十五首」
・安山親敬「逍遥舎十景和歌」

⑶肥後歌壇と細川家和歌資料の調査分析

①細川就『東海道御道の記』

文化 4 年に細川就が著した『東海道御道の記』の伝本を整理し、内容を検証、翻刻を作成した。

・岩国徴古館蔵「細川家姫君様東海道御道之記」
・熊本大学文学部蔵「就君様御紀行」（『淀の芥』所収）
・関西大学長澤文庫蔵「東海道御道記」
・九州大学宇土細川家文書蔵「御道の記」
・『女鑑』第 188･189 号「思立旅の記」（明治 32 年刊）
・高野白哀編『肥後女性鑑』（昭和 16 年刊）

②細川就『桂の里の紀行』

文化 6 年に細川就が著した『桂の里の紀行』の伝本を整理し、内容を検証、翻刻を作成した。

・熊本大学文学部蔵「桂能里の紀行」
・熊本大学文学部蔵「桂之里御紀行」（『淀の芥』所収）
・熊本県立図書館竹原陽次郎家文庫蔵「桂能里御紀行」
・熊本県立図書館蔵「桂能里の記行」（『雑撰録』巻 35 所収）
・熊本県立図書館上妻文庫蔵「桂の里の紀行」
・『女鑑』第 192 号「桂里の記」（明治 32 年刊）

③大詢院五十回忌追善和歌

肥後熊本藩第 7 代藩主細川治年（大詢院）五十回忌に皇族・公家・幕府方や熊本藩士が詠じた追善和歌に関する以下の資料を蒐集・整理し、翻刻を作成した。

・熊本大学永青文庫蔵「治年公五十回御忌御追慕」（108.6.36）
・架蔵「大詢院五十回忌追悼和歌」
・架蔵「治年五十回忌追悼五十首」

④細川就『桜木集』

嘉永 5 年に出版された細川就の歌集『桜木集』について調査し、翻刻を作成した。

・熊本大学附属図書館永青文庫蔵本（224-100-4）2 冊
・熊本大学附属図書館永青文庫蔵本（224-101-1）3 冊
・熊本大学附属図書館永青文庫蔵本（224-101-2）3 冊
・熊本市立図書館武藤文庫蔵本（5-5）3 冊
・九州大学中央図書館雅俗文庫蔵本（雅俗文庫-32 歌書 a-ｻｸ-1～3）3 冊
・広島大学附属図書館蔵本（350）3 冊
・慶應義塾大学蔵本（87-23-1～3）3 冊
・東北大学狩野文庫蔵本（4-10677-3）3 冊

・福井県文書館松平文庫蔵本（M911-39）3 冊
・架蔵本（熊谷武至旧蔵） 3 冊
⑤熊本大学永青文庫所蔵細川就関係資料
永青文庫所蔵の細川就関係和歌資料ならびに書簡について整理し、就の事績をまとめ、年譜を作成した。

４．研究成果
⑴佐賀歌壇資料の調査分析
①『新拾葉集』
佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『新拾葉集』は、小城藩第二代藩主鍋島直能の編んだものであるが、その書写形態などにより、直能が蒐集した同時代の皇族や堂上歌人の懐紙・短冊等がもとになっていると考えられる。とりわけ、後水尾院・後西院歌壇の主要歌人の歌が多くとられており、近世前期の佐賀歌壇と堂上との関係を物語る資料といえる。
②南里有隣を中心とする本教館和歌資料
佐賀県立図書館蔵『本教館詠草一』『本教館詠草二』『万延元季詠草』は、嘉永 6 年から文久 3 年までの南里有隣を中心とする私塾本教館とその周辺の人々の歌を時代順にまとめたものである。『本教館詠草一』401 首、『本教館詠草二』963 首、『万延元季詠草』1325 首の大部な歌集であり、従来ほとんど指摘されてこなかった近世後期佐賀歌壇の実態を明らかにすることができた。
③白石鍋島家和歌資料
佐賀県立図書館鍋島文庫の和歌資料のうち、白石鍋島家第 6 代当主鍋島直章（花殿）の名が確認される詠草類を調査したところ、久世通理から添削指導を受けたと思われる詠草が確認された。このほかにも、堂上歌人から与えられた歌題による複数名の歌が確認され、嘉永・安政年間に白石鍋島家を中心に堂上歌学の影響を受けた歌壇を形成していたことが判明した。また、第 7 代当主直暠夫人芳子の詠草も多く残されており、堂上歌人から添削を受けたらしいことが確認された。

⑵薩摩・大隅地方の和歌資料の調査分析
①伊集院兼愷編『浪の藻屑』
『浪の藻屑』は、天保 6 年に垂水島津家第 13 代当主島津貴典の命により家老の伊集院兼愷が編んだ歌集である。跋文には、垂水の歌人たちが飛鳥井家に和歌を師事していたことが記述されている。垂水歌壇は、垂水島津家第 9 代当主の島津貴儔の次男周山（末川久救）が飛鳥井雅重に入門し歌壇を作ったことが始まりとされるが、周山が編んだ『浪の下草』には飛鳥井家との関係は具体的には見出せない。一方、『浪の藻屑』やその周辺資料からは、当主貴典と家老兼愷らが一同に飛鳥井雅光に師事し、本歌集を編むにあたっても添削を受けていたことが確認され、周山の時代よりも堂上歌人との関係が深く、歌壇活動も盛んであったことが明らかとなった。
②伊集院兼愷『すさび草』『すさび草後編』
文化 13 年に雅光へ歌道入門し添削指導を受けるようになった兼愷は、『浪の藻屑』撰集後の天保 7 年 12 月に自撰歌集『すさび草』、嘉永 2 年 12 月に『すさび草後編』を編んでいる。「飛鳥井卿句題三十首」「飛鳥井卿月次御題」「御会始御題」などの飛鳥井雅光から与えられた歌題による歌が多くみられ、段階的な和歌指導が行われていたことが確認される。また、雅光が伊勢物語伝受などの御所伝受を授かったことを祝う記述もあり、垂水歌人たちが堂上歌学に対して強い関心を持ち、桂園派が浸透しつつある藩内の様相とは異なり、少なくとも雅光の没する嘉永 4 年以前までは堂上との関係を維持していたことが明らかになった。
③垂水手貫神社蔵奉納和歌
垂水市手貫神社蔵奉納和歌は、「奉納和歌入」「慶応四年戊辰八月／町田実維」と墨書のある箱に収められたもので、天保 9 年から明治 2 年までの奉納和歌 28 点が確認される。これらの奉納和歌から、兼愷の没後も垂水歌壇の伝統が続いていたことがわかる。その中心にいたのは伊地知季融で、『鰒玉集作者姓名録』にもその名が確認される。『拾遺愚草』や『拾玉集』の歌題によるものが多く、周山の時代に築かれた堂上風の伝統が幕末まで連綿と受け継がれていたことが確認された。

⑶肥後歌壇と細川家和歌資料の調査分析
①細川就『東海道御道の記』
『東海道御道の記』は、文化 4 年に細川就が久我通明に嫁し、江戸から京都今出川への輿入れの道中を記した紀行文である。自筆本は見つかっておらず、伝本間で本文の異同が多い。亡父治年の回想などの記事も見られる。『織仁親王行実』には、京都へ到着した就に有栖川宮織仁親王より婚礼の賀品が下賜された記事があり、織仁親王の歌道・書道門人であった就と有栖川宮家との関係性がうかがえる。
②細川就『桂の里の紀行』
『桂の里の紀行』は、細川幽斎二百回忌にあたる文化 6 年に就が桂離宮の園林堂を拝観した際の紀行文である。今回の調査で自筆本を入手し、伝本間の異同を整理することができた。園林堂には、智仁親王の尊影と智仁親王へ古今伝受を行った幽斎の御影が掲げられていた。就は先祖幽

斎の御影を拝すために桂離宮へ足を運んだのであり、『桂の里の紀行』のなかにも幽斎崇拝の意識が看取される。また、永青文庫には桂宮諸太夫尾崎積興から借用書写した歌学書があり、桂離宮拝観と幽斎二百回忌を契機として、就の近世前期の堂上歌学への関心は一層強くなったと考えられる。

③大詢院五十回忌追善和歌

肥後熊本藩第7代藩主細川治年（大詢院）五十回忌に熊本藩士らが詠じた新出資料「大詢院五十回忌追悼五十首」について調査した。その冒頭には治年五十回忌の法要を末女の就が執り行い、五十首も就の依頼によることが記される。真幸・中島広足門下の名が並び、久我通明に嫁し堂上歌学を学んだ就と熊本藩士との間に文化的な交流のあったことがわかる。永青文庫蔵「治年公五十回御忌御追慕」や架蔵の追善和歌からも、就が公家と武家の双方に働きかけていたことが確認される。また、有栖川宮韶仁親王・有栖川宮幟仁親王・仁和寺宮済仁法親王・梶井宮承真法親王・知恩院宮尊超法親王の名が見え、織仁親王薨去後も、有栖川宮家との交流があったことが明らかとなった。

⑷ 細川就『桜木集』

『桜木集』は就の七周忌にあたる嘉永5年に出版された歌集で、息子の久我建通と第10代藩主細川斉護の序を付す。現存本の所在を確認し、本文を翻刻した。上冊は四季・恋・雑の部立てで構成され、中冊は享和元年から文化6年まで、下冊は文化7年から文政13年までの歌を年次順に載せる。上冊雑部には幽斎二百回忌の追善和歌をはじめ、幽斎の忌日に詠じた歌が多く見え、幽斎に傾倒した就の様子が見てとれる。このほか、中冊・下冊にも幽斎の忌日に詠じた歌が散見される。また、織仁親王門下であった就と堂上歌壇との関わりも明らかになった。

⑸ 熊本大学永青文庫所蔵細川就関係資料

永青文庫所蔵の細川就関係和歌資料ならびに書簡について整理した。『職仁親王行実』『織仁親王行実』や宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『入木門人帖』等を確認すると、就の織仁親王入門以前に、宝暦7年12月に熊本藩御用人竹原勘十郎（玄路）が、宝暦8年1月に第6代藩主重賢の実妹清源院軌子が職仁親王に歌道入門しているが、その後しばらくは有栖川宮家への入門者は確認されない。寛政12年4月の就の織仁親王への歌道入門が契機となり、第9代藩主斉樹室紀姫（徳川治済女）、斉樹妹邵姫（一条忠良室）が相次いで書道入門し、さらに斉樹の実兄立之（宇土藩第7代藩主）が歌道入門していることが判明した。また、幽斎二百回忌の際には一条忠良を介して追善和歌に関して就が積極的に公武に働きかけていたこと、織仁親王の御点を受けるはずであったが、病中であったために、忠良から点を受けたことなどが明らかとなった。就は幽斎忌などの折々に斉護に献歌を求めるなど、堂上と藩とを文化的に繋ぐ存在であったことが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 日高愛子	４．巻 54
２．論文標題 細川就と有栖川宮家 ―織仁親王への入門をめぐって	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国語国文学研究	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日高 愛子	４．巻 53
２．論文標題 久我美子自筆『桂能里の紀行』解題と翻刻	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国語国文学研究	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日高愛子	４．巻 52
２．論文標題 大詢院五十回忌追悼五十首―翻字と解題―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国語国文学研究	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日高愛子	４．巻
２．論文標題 資料紹介　南里有隣関係歌集	５．発行年 2021年
３．雑誌名 共同研究（特定研究（若手））研究成果報告 幕末地方歌壇の研究―佐賀藩の場合―	６．最初と最後の頁 111-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中尾友香梨・白石良夫・大久保順子・土屋育子・沼尻利通・日高愛子	4．巻 7
2．論文標題 小城鍋島文庫蔵書解題稿（三）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	6．最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 日高愛子
2．発表標題 久我美子の紀行文と和歌
3．学会等名 第138回和歌文学会関西例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 日高愛子
2．発表標題 近世大名家の女性文芸 ― 肥後細川家を例として
3．学会等名 東アジア日本研究者協議会 第6回国際学術大会（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 日高愛子
2．発表標題 近世肥後の文事 ― 細川就を中心に
3．学会等名 熊本大学国語国文学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 日高愛子
２．発表標題 近世後期における堂上派地方歌壇の展開―肥前・薩摩を例として―
３．学会等名 西日本国語国文学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高愛子
２．発表標題 芸道としての蹴鞠の歴史と日本における展開
３．学会等名 第４回東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高愛子
２．発表標題 近世九州歌壇の一様相―薩摩と飛鳥井雅光
３．学会等名 古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究 年度末研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 日高愛子
２．発表標題 佐賀県立図書館所蔵和歌資料にみる幕末佐賀歌壇―南里有隣、白石鍋島家の和歌活動―
３．学会等名 第4回幕末佐賀歌壇研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 日高　愛子	4．発行年 2022年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 528
3．書名 飛鳥井家歌学の形成と展開	

1．著者名 三ツ松誠・村上義明編、伊藤昭弘・白石良夫・中尾友香梨・中尾健一郎・日高愛子著	4．発行年 2019年
2．出版社 佐賀大学地域学歴史文化研究センター	5．総ページ数 115
3．書名 令和元度佐賀大学・小城市交流事業特別展図録　京の雅と小城藩	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関